

戻る

TO HOME

「アバの歌に励まされた旅」平成 16 年 11 月 10 日～19 日

「金婚式記念アメリカ旅行の記」 森山志郎

晏子

序「改訂版の発行について」	2
金婚式記念アメリカ旅行記	
成田までの道のり	3
一部 老人夫婦の道中記	
赤ゲットの二人連れ	4
ロスアンゼルス	5
空港と入国手続きー太平洋海岸でー棲み分けー住宅 豊富に使われている木材 豊かな農作物 車社会	
「カリフォルニアとロスのダウンタウン」	9
「パサデナとハンチントンライブラリー」	11
「ハリウッド」	12
「ラスベガスの空港とグランドキャニオン」	13
「ラスベガスとホテル」	16
「知らなかったアメリカ」	18
アメリカの野菜 共生の社会	
アバの歌に涙溢れる	20
ミュージカル『マンマ・ミーヤ』	
二部 私が考えねばならないこと	
「アメリカ社会と国家の歴史を考える」	21
「アメリカの自由、日本の自由を問い直す」	22
「アメリカのパブリックと日本の公共」	24
「棲み分けの思想を考える」	26



序「改訂版の発行について」

昨年の秋、私たちは結婚して 49 年を迎え、金婚式の前祝の記念に海外に旅行に出かけることにした。

二級の障害者手帳を持つ 75 歳と 72 歳の老夫婦が、揃って海外に行くことは一種の冒険に思えた。しかし、思い切って実行してみると、「案ずるよりも生むが易し」だった。

これまでの人生では幾度も難局に出会ったが、夫婦の健康と信頼に支えられて、局面は切り開かれて新しい展望が開けたのである。その日々の努力の中に、常に人生は「現在が最高に美しい」と新しい世界を見せてくれた。

障害者になったことは、確かに私たちの人生にとって大きな痛恨の出来事であった。若し倒れていなければとの思いは常に付きまとった。しかし、決してそれは、私の人生を後悔させるものにはしなかった。むしろ、障害を得たことで、人間の理解とか、人生に対する先哲の深い探求にも接することが出来て、より広い視野を得て生きる転機になってくれたことに感謝できるようになった。

アメリカから帰ったら私の「人生の収めの舞い」に入る予定だった。ところが、アメリカ旅行は私の好奇心に火をつけ、「アバの歌声」に励まされ、アメリカが幕臣福沢諭吉の人生観を変えたように、私の心にも大きな影響をあたえた。

とりあえず次ぎの世代のために、旅行記「アバの歌に励まされて」を書き上げ、続いて「娘に伝えたい私のアメリカ史」を書いた。

そして「人生の納めの舞い」は時期尚早として無期延期とし、私は「もう 75 歳」から「まだ 75 歳」と思い直した一年だった。妻のサポートを杖に、与えられた小さな社会的な役割を通じて、新しい勉強と取り組む中で、日米の文化の格差を痛感した。文化の相違を自問自答することで、これから私が努力しなければならない問題点が、おぼろげに見えてきた

太平洋を挟んだ隣国であるに関わらずアメリカは、余りにも遠い国だった。戦前、戦中のアメリカは敵国「鬼畜」として教えられた不幸な歴史が残念である。その反動で戦後のパラダイス説では、過剰に美化されて伝えられ、その文化は、多分に理解不十分な内容も多くあると感じた。等身大の文化を知ることは難しい作業である。

21 世紀は、日本はアメリカや近隣諸国と、共存しなければならない時代を迎える。新しく得たアメリ

カ文化の視点で見ると、日本の文化に内在する問題点が一段と深く理解出来るようになったと信じる。まず、お互いの文化の特質を把握し、その個性を確認する仕事がある。この仕事の中に、老人がこの生涯で頂いた、社会からの恩恵に応える道があると思える。問題の所在を指摘することが出来れば解決が出来なくても、本望である。解決は次の世代に期待しよう。

そこで、改訂版を作り、次の世代が成長する肥やしと、老いながら成長を続ける自分自身の記念碑にしたいと思う。

平成 17 年 11 月 12 日

成田までの道のり

1955 年 11 月 15 日、私たちは佐賀の田舎にある両親の家で両家の身内に祝福されて、つつましい結婚式を挙げた。私は旧制大学を卒業して二年、鉱山会社に就職していたが、まだ、現場の炭鉱で下積みのサラリーマンだった。妻は短大の教育学部を卒業して中学の教師をしていた。

二人は英語教師だった父の計らいで見合いして、ゆっくりした交際期間の後、挙式にこぎつけたのだった。新婚旅行と言っても、隣町である嬉野温泉（現在は合併して同じ町内になった）にある旅館に一泊して、忙しいお互いの職場にそそくさと戻った。

日本の産業構造の変革に伴って、私の勤めていた炭鉱は閉山し、家族と共に新しい会社、旭化成に転職して、必死に働いた。工場と営業の職場だったが激しく変転する時代だった。高度成長経済、為替の問題は企業の体質を強制的に変えさせた。



そして、気がつくと 30 回目の記念日は、私は札幌で支社長になっていたが同時に、脳梗塞で右マヒの体をベッドに横たえていた。そこに娘から 30 本の真紅のバラが東京から病室に届けられた。

「働き蜂」とか「ワークホリック」と擲揄された時代のサラリーマンが労働不能になったのだ。退院してリハビリテーションに取り組むものの、残された人生を如何に生きるべきか、迷いに迷った。右半身が使い物にならない体で生きるとは、どう生きるのか、新しい自分を見つめ続けた 20 年だった。

今年は結婚して指折り数えると 50 年が経つではないか。障害があっても、そんな私を支えてきた妻

と、金婚式という形で感謝の気持ちが伝えられたら良いな。アメリカで職を得ている次女の様子も見てみたい。でもアメリカまでは障害のある老人には遠いかな、途中で大丈夫かな。年金生活では資金の余裕もないだろうし、と不安や期待が行きかう中で、パソコンをいじるうちに、格安の航空運賃があることを知った。

調べると、何と、ロスまで二人往復で八万円とある。国内の旅行運賃よりも安い。「これだ！金婚式の内祝いはロスに決めた」

かくて私たち夫婦は平成 16 年（2004 年）11 月 10 日、JR 戸塚 8 時 32 分発の直行便で成田に向かう。通勤時間で満員だったが横浜で座れた。そして東京を過ぎて一時間、「何故？こんな遠いところに空港を作ったの？」これが成田に対する第一印象だった。私の現役時代には、国内線も海外線もすべて羽田からだったから、成田を使うのは初めての体験である。

成田の広いターミナルには、大きく A・B・C・とチェックイン・カウンターが並んでいる。しかし、格安運賃で予約していたチケットは、ここの指定された G というカウンターでしか受け取れない。その肝心の G カウンターの場所の表示が見つからない。気持ちが苛ついてきたとき、ようやく行き止まりを曲がった先に小ぶりの G の表示を見つけて足取りも軽くなった。そこの五番カウンターでチケットの現物を受けとって安心した。トランクは義妹から借用し、前日宅急便で空港に運んでおいたから、そこで受け取った。

一部 老人夫婦の道中記 「赤ゲットの二人づれ」



料金の安い「大韓航空」の K E 001 便は、14 時 55 分発で、比較的に白人と日本人の乗客が多かった。私は足が伸ばせるよう中央の列の通路側に座った。正面に大型のディスプレイがあり、各所に補助のスクリーンがある。

スチュワーデスは皆若く、てきぱきと身をこなしていたので気持ちが良い。食事は洋風と韓国風の二種類から選択できたが、妻は興味から韓国風のランチを選んで、見よう見真似でスプーンでご飯と惣菜をかき混ぜながら食べていた。私は洋風のランチを選んだが、お世辞にも美味しいとはいえない「食味」だった。

正面のディスプレイとスクリーンで、現在の状況 高度・速度・風力・推定到着時刻等、案内の表示が刻々に表示されていた。太平洋には西から東に向けたジェット気流が流れており、旨くその追い風に乗れる東行きの場合は、逆風になる西行きと比べると、三時間くらい飛行時間に差があるそうだ。

成田を出発した飛行機は、太平洋の上を「大圏コース」で放物線を描いて東に向かっていく。東に向かうから「アッ」と云う間に日暮れを迎え、「アッ」と言う間に暗く短い夜になった。

映画が上映されたが、ショーン・コネリー主演の「アーサー王物語」で、西洋紙芝居といわれる娯楽作品だった。登場する人物がテニスの「アーサー王物語」の戯曲で親しんでいた名前だったので、それを思い出しながら面白く見る事が出来た。勿論、日本語の説明がついていたからである。

暫く漆黒の太平洋の上を飛ぶが、寝ている間に日付変更線を超えたので夜明けを迎えると10日の旭が燦々と降っていた。朝食の後、機内の放送画面で「エコノミー症候群」を防止する体操の指導が流された。長時間動かさないだけで人体に悪い影響がでることが医学的に分かったからである。10日の午後成田を出発したのに、10日の朝ロスアンゼルス空港についた。何か、時間を儲けたみたい、変な気持ちである。



ロスアンゼルス

「空港と入国手続き」

150年前に、福沢諭吉が咸臨丸に乗って、近代文明に触れて目を見張ったアメリカに、ようやく私も遅れてやってきたのである。

飛行機は滑らかに着陸したが、タキシングをして広い空港を走り、ようやく止まった。「なんて広い空港なんだ！」それがアメリカの第一印象だった。二つの滑走路から、同一の方向に向けて同時に離陸する二つの機影に驚いた。成田空港の敷地の狭さと、短かくて数の少ない滑走路と比べて見ると、日米を比較する格好の事例だろう。理屈の上では、人の住める可住面積の広さが日本と比べると、一人当たり、数倍広いことは承知していたが、現実に目にすると、素直な驚きが変わっていった。

飛行機を降りて、バスでターミナルに向かったが混雑を避けて、最後尾を妻と二人でゆっくりと行く。

飛行場の入国手続きの場面では、飛行場で働く職員の、人種の多様性に感心した。入国審査・バゲージクレーム・バス運転・場内警備・案内と、空港職員の多彩な身長差、肌の色のグラデーションに驚き感心した。入国の審査官は白人だったが、滞在日数や旅行の目的、滞在の宿舎を聞かれて、私の英語で通じた。さすがに、と妻の手前、少々鼻を高くして見せた。ところがここでいきなり指紋と顔写真を撮られた上に、強制的にパスポート記載内容を「情報」として、アメリカ政府のコンピューターに登録されてしまった。

これを「プライバシーの侵害だ！」と言っても、アメリカでは誰も耳を貸さない問題だろう。ゲリラ攻撃の防衛に迫られて、入国者をチェックするのは、やむを得ない対策とされている。嘗ての明らかに外国人を受け入れる気風は消え去っている。

日本では「個人情報の秘匿」が重要で「プライバシーの保護」という目的のために、福祉活動に必要な名簿すら作ることが困難だし、独居老人の実情も民間では把握が出来ない。すべては情報を持つお役所に一任するしかないのである。「情報の開示」と言う社会情勢と合わせて、これから必要の増す、高齢者のサポート問題と、どう取り組めば良いのか。日本の役所が情報の開示を躊躇している間に、情報に付いての世界の常識はドンドン変化していることに注目する必要がある。

私たちがゆっくりとしていたので、出迎えの娘が心配していたが、一年ぶりに再会することが出来て、さすがに妻は娘と素直に抱き合って喜んでた。



「太平洋海岸で」

娘の運転で西海岸に出て夕日が沈むのを見に行った。太平洋の西の端の横浜からきて、その東端のカリフォルニアの海岸に立って太平洋の波が岸壁に砕け散る風景や、大きな水平線に夕日が沈む光景を見ることは一種の感動を誘う。

ここから見ると横浜は水平線のはるかな彼方の行き止まりにある。同じ地球でも、ここから見ると眺望の条件が良いためか、宮崎よりも千葉よりも地球の丸さが実感できた。

このロングビーチに連なる高級住宅地の海岸は、四季を通じて花が咲き、雪の降ることもなく、ストレスフリーで素晴らしい住宅地である。アメリカでは、景色の良い高台に家を建てるのが人々の夢だそうだが、反面、雨や嵐などの自然災害で家屋が地盤ごと破壊され倒壊することもあると聞く。それでも夢を追う人はなくなるそう。人影もなく、孤独な老人社会の哀歎を思わせ、私のような貧乏性には向かない土地かもしれないとも思った。

見上げる空に浮かぶ雲の影もない一種の不思議さ。でも、時には雨が降るらしい。そして、時に日本の夕立のような雨が降ると、多くの住宅に浸水する事件も発生するらしい。雨水の排水溝もない道路があると聞いて驚いたが、ロスの空はいつも拭き取ったような紺碧の青空である。

バオバブのような巨木が枝を広げて並木になっていて羨ましい。その巨木並木の街路樹の用地で、日本なら、一級の国道が建設できるほどの面積である。

狭い日本が都市計画を考える時は、猿真似でなく「英知」を必要とする。

「棲み分けについて」

アメリカ社会の成長と拡大を支えた底辺のシステムに膨大な黒人や、欧州の移民労働力が使われたと説明がある。そして、それらは主として農業労働や、都市基盤の労働、ブルーワーカーと呼ばれる単純労働の職種に従事する労働者とされた。

現実に目にした労働者は、ロサンゼルス空港の検査官をしている黒人、しかも右腕のない係官もいた。入国審査の白人、要所にたむろする警官は白人、バグゲージクレームの女性は移民らしい白人、構内運輸の電気自動車の運転は老婦人だった。それにしても高齢者でも障害があっても堂々と良く働らき、仲間も大事にしている社会だ。

「LIGHTHAUS社」の込山社長に招かれて、ゴルフ場のレストランで昼食をとったが、クラブメンバーになることは日本同様一つのステータスシンボルであり、特にアメリカ社会では、どこのクラブのメンバーかと言うことは社会的地位を表しており、大事な要素とされているとのこと。

外を見ると、プレーをしているのは高齢の白人男女ばかりであり、レストランで食事をしているのは私たちを除いてすべて白人、食事のサービスしたり、ゴルフ場を整備しているのは美髯を蓄えたメキシコ系の米人であった。「私、遊ぶ人、あなた働く人」という好対照の図柄だった。

「住宅」

娘の住まいはロスの南郊外の、サウスベイ地区にある、トーランスという住宅都市にあった。アパートだが日本では滅多に見ない形式である。

地下にある駐車場の入り口はサインに応じて自動的に扉が開き、そこの一四〇台ほどの専用駐車場に入る。そこから通路を上がると、プールが二つあり満々と青い水がみなぎっているが温泉だとのこと。又上がるとそこは中庭になっており椰子や草花が管理されている。

母屋の建物と別に幾つかの建物が建つ。外階段を上がると娘の部屋の前である。この階段を使っている部屋は、もう一軒あるが屋外の通路を挟んで離れている。つまり、階下とも隣とも、一切没交渉の空間設計である。日本流に云うと、寝室と居間と食堂とキッチンにトイレ・バスがある3Kになるだろう。

全体はほぼ真四角の構造で、頑丈な骨組みと、パネルで作られた簡単な構造である。炊事場の冷蔵庫・オープン・食器乾燥機等の必要設備は室に備わっており、生ゴミはディスポーザーで処理して下水道に流すから「生ごみ問題」は発生しない。洗濯機と乾燥機は共同設備で、空気が乾燥しているので風呂には入らず、シャワーで充分である。

それで家賃は十二万円程度と聞いたが、娘が昔住んでいた東京の下町のアパートの値段もそんなものだった。居住費が無茶に安い。



「豊富に使われている木材」

アメリカの社会がこれほど、木材を利用している社会とは知らなかった。これは私の常識を遙に超えて使われていた。

日本では戦時中に松の木は徹底的に伐採され、幹は炭鉱の坑木に利用され、その根は松根油を取る原料にされたのである。

戦後は荒廃した山に緑を回復させようと成長の早い杉が全国で植えられたが、手入れが不足して、最近では春先に「スギ花粉症」の元凶と非難を浴びている。山林が一人前に成長するまで、手入れして経営する能力にかけりが出て、必要な間伐も出来ず、代替品として開発されたコンクリート製品が普及してしまった。

従って日本では鉄筋コンクリートのアパートが目立つが、アメリカのアパートには立派な木材が使われていたし、建築現場では三階建ても木材ばかり使われていた。日本ではコンクリート製の電柱なのに、それよりも高さが優に五割も高い木製の電柱が使われていたのに驚いた。日本では電線の邪魔になるからと街路樹が枝を切られるか、電柱は高いので、そんなことも必要のない高さである。

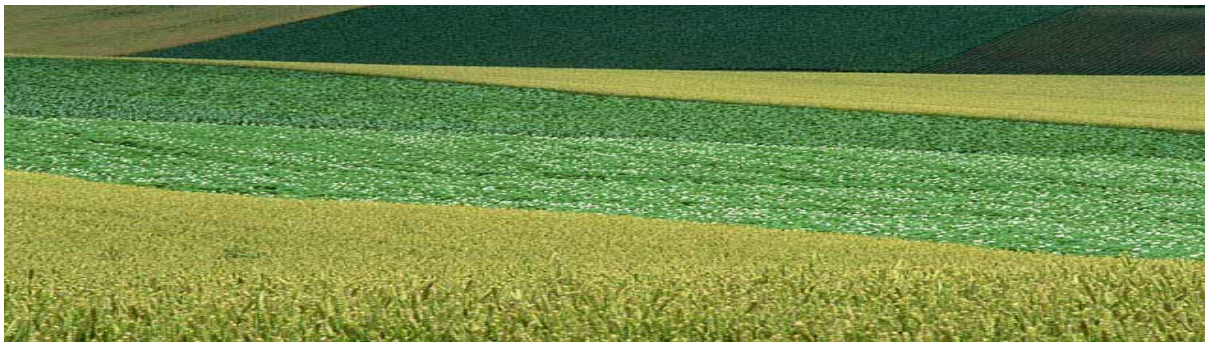
日本で公園に行くと、ベンチに座っても冷たいコンクリートで、柵も木に似せたコンクリート製である。日本がこれほど木材文化に見放されていたとは、アメリカに行くまで気がつかなかった。

日本の杉材とは明らかに異なっていた木材で見事な惚れ惚れするような真っ直ぐな杉材である。メタセコイアなのか、何なのか。そしてこれは、どんな種類の杉材なのか、何故日本の林業では勝れた素材が産出できないのか。専門家の意見を聞きたいと思った。

しかもスーパーでは燃料に使うヒッコリーの廃材が売られていたし、朝市でピーナッツを焙煎していた炉には、これも木材が燃料として使われていた。日本のようにエネルギー資源の乏しい国なのに、社会全体で輸入資源に頼って、自然の資源循環を遠ざけていることは静かに再考を要する問題である。

娘の部屋も梁に立派な木材が縦横に組まれていたが、特に家具類の調度品は、マホガニーに類した、硬くて重厚な素材だった。戦後日本のぺらぺらのベニヤ板とプラスチック文化に慣れた私に改めてアメリカ文化の持つ、重厚な側面を再評価させた。

ラスベガスからグランドキャニオンに行く飛行機から見た原生林の堂々たる姿を見て「なるほど！」と思った。アメリカ全土に広がる、斧の入らない豊富な木材資源の保有がアメリカの政策のバックボーンにあることが理解出来た。



「豊かな農作物」

毎週土曜日の早朝「朝市」が開かれると云うので、親子で出かけた。広い敷地に駐車場が備えてあり、参加者は持参したポータブルのテントを一人か二人で 10 分くらいで組み立てて店舗を作る。簡単な巨大こうもり傘タイプのテントもあった。その店舗にテーブルを置き、持参の「取立て商品」を次々に並べると、もう見事な市場が出来上がるのである。

内容は野菜と果物が中心だが、その豊富な内容に驚いた。キャベツ・レタス・小松菜・太葱・細葱・玉葱・ほうれん草・大根・人参・ジャガイモ(大・小・黒・丸い・長い)・サツマイモ・南瓜・蕓・春菊・紫蘇・きゅうり・ナス・インゲン・グリーンアスパラ・ナッツ・ざくろ・蜜柑・なし・柿・リンゴ・富士リンゴ・スイカ・メロン・葡萄そして数え切れない種類の産物が並ぶ。それはコーティングされていない、自然のままの状態なので嬉しくなった。

パン屋にはいろんな形や種類の、豊富な焼きたてのパンが並び、ソーセージとコーヒーで朝食を済ませる人の姿もあった。メキシコが近いためタコス等のメキシコ料理も目立った。

白人と黒人と褐色人とメキシコ系と東洋人とが一緒に雑踏を作っていた。私は買い物に来ていた東洋人から「アンニョン・ハシムニカ」と笑顔で声を掛けられた。韓国人と思ったのだろうか。それとも韓国人が気軽に母国語で挨拶したのだろうか。面白いカートがあった。取っ手が沢山ついていて、買い物の袋を一つずつ其れに引っ掛けて店の並びを買い歩いていた。それにしても、アメリカの農民のたくましい生産力に感心した。柿・梨はどうも日本からやってきた、進取の気象を持つ農民の活躍らしい。

日本の農業政策では、産業としての農業を振興するではなく、選挙地盤の対策としての個別農家の保護に走ったのではないか。かくて、「悪貨は良貨を駆逐する」と云う原則が働き、積極的な意思と能力を持つ、競争のできる農民は国外に流出したのではないかと不安を感じた。

積極的な行動力を持つ農業者が日本農業に戻ってこない、産業としての、日本の農業に明日はないのかも知れないと不安が胸を掠めたのである。

「車社会」

言葉では知っていたが現実に見ると大変な社会だと思う。歴史的にアメリカの国内でも、19世紀後半に大陸横断鉄道が開通してそれまでの馬車が輸送の主役としての地位を譲り渡した。

アメリカの国内では、南北戦争の後でようやく開発された西海岸では、公共交通機関を整備するよりも、20世紀の初頭には、フォードによる自動車の普及が始まっていた。大量輸送の鉄道計画はあっても、その「停車場にクルマの駐車場が必要」となり、とても対応が出来なかったとのことである。

駐車場で驚いたことは、障害者マークのある駐車スペースが広いことで、普通の駐車スペースの二倍はある。アメリカではガソリン代も、ガロンニドル少々だからリッター5、60円前後と安い。しかし、ガソリンに依存している社会なので、アメリカは石油資源の独占欲が強いのであろう。

道路の交通規則は厳しく、路面の表示には、「このレーンは必ず右折すること」とか、交差点に近づくと「クロッシング・車線の変更に注意」とか、「歩行者に注意」とか「信号に従って左折すること」とかあり、又「STOP」と一時停止の表示がある所では、必ずキチンと停車していたのには感心した。「公共」の役割と、それを遵守する「順法精神」の在り方に感心した。娘の説明では「罰金が高いから」ということだったが。

スーパーに行って驚いたことは、多くのクルマが出入りする場所には、通路が必ず速度を落とさざるを得ない「バンフ」が設けられ、構造的に慎重な運転を求めていることである。車と人の共存を図る知恵であろう。日本も、このような人と車が共生できる工夫は謙虚に学ぶべきであろう。



「カリフォルニアとロスのダウンタウン」

カリフォルニア州の人口は、3500万弱で日本の総人口が1億3000万と比べると27%、面積は、15万平方メートル、で日本の37万平方メートルの40%倍、ざっと見ても一人当たりの土地面積は日本の二倍に近い。

ここがアメリカに併合されたのは、1846年である。アメリカはメキシコと戦端を開き、ロッキー山脈を越えてカリフォルニアを占領したが、その直後の1848年鉱物資源の開発に熱心な移民の手によってカリフォルニアで金鉱が発見され、ゴールドラッシュが起き一挙に人口が増加した。テキサスの石油ブームとこの土地の鉱物資源でアメリカの富は潤ったと言われる。土佐の漁師で難破してアメリカまで行った、ジョン万次郎は、日本に帰る旅費を工面するために、砂金を掘ったと伝えられているから余程、沢山取れたのであろう。

金鉱の発見がカリフォルニア開発の大きな原動力になったこともあり、今でもGOLDEN STATEと呼ばれている。

古くからスペインはこの土地に多くの開発拠点を設けていたので、スペイン文化を色濃く残す土地である。

神の使命で「西へ！西へ！」と来たアメリカ文化の発展は、ここで大陸は尽きて太平洋と云う終点に到達した。しかし今度は、その太平洋を西へ進む起点となる。かくてアメリカは、今度は海を渡って更に西へ進むために海軍力の増強に努めたのだった。

「食事」

R夫人のご招待で私たちは到着したその日、小さな日本料理店で和食をご馳走になった。新鮮な現地の魚介類は美味しかった。この沿岸は、カリフォルニア寒流が太平洋暖流と交わる所なので、水産資源が豊かなことを実感した。

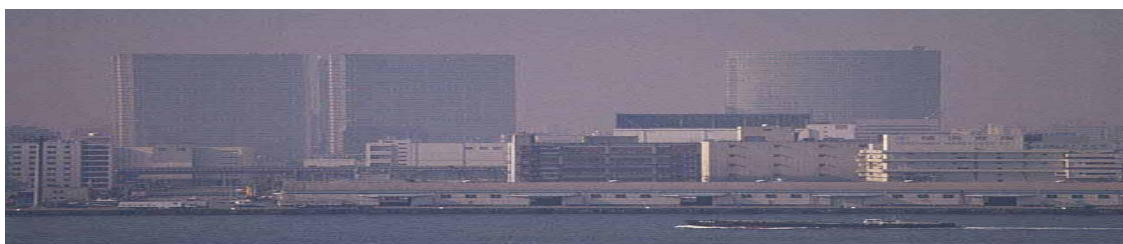
二日目は車でロスの市内を通り、日本寺院のあるリトルトウキョウとか中華街というダウンタウンで「棲み分け」社会を覗いた後、中華街の大食堂の昼食で「飲茶」を楽しんだ。

広い部屋には四人掛けのテーブルがずらりと並び、そのテーブルの間をワゴンに載せた一品料理が回遊する。そして客の求めに従って四人分セットの料理を置き、伝票にマークする。それに従って客は帰りに精算すれば良い。

バイキングのように皿を持ってお客が立歩くのではなく、料理の方から廻ってきてくれるので、私のように障害のある体には勝れた方式と思う。価格も四人分で25ドルと、その安さに驚いた。食べ残しは平気で「持ち帰りパック」が準備されて、無理にその場で食べなくて済む。日本でも是非、取り入れたい習慣である。

もう一つ驚いたことは中国人の「騒音」に対する感覚が日本人とかけ離れていることである。茶碗とお皿が衝突する音が「ガチャガチャ」と絶え間なく響き渡る中で、お客は平然と食事し、その騒音に負けない大きな声で談笑している。日本人が愛する「静謐」など全くの無縁な言語である。

ダウンタウンで残念に思ったことは、日本人社会のリトルトウキョウは衰退して見る影もないことだった。日本人はバブル景気に乗ってビバリーヒル等の高級住宅地を買占めしたが、その崩壊とともに多額の損失を出して撤退し、日本人社会も激減しているらしい。日本人は長期的な視野に立って何事かを為すことが不得手なのかも知れないと思った。それに反して中華街はエネルギーにあふれている。



ロスの市内にある大きなコンベンションホールでは、毎年、移民の帰化宣誓式があるとのことであるが、最近では宣誓対象者が5000人を超えて、さしもの巨大なホールも収容できなくなるほどのことだ。物質的に豊かで自然環境の良いアメリカに住みたい人が多いことに不思議はないと思った。ただし、日本人は二重国籍は持っていても帰化する人は少ないそうである。

アメリカ文化の特性は「多様性」を内包しながら、「統一」のために、星条旗を国旗として学校や役所で仰ぎ、スポーツの観客も国歌を一緒に歌うことで、一つの国民としての意識を自覚させている点にあらう。リンカーンが高い評価を得ているのは「奴隷解放」ではなく、分離主義を武力で統一国家を維持した点にあることを知った。

こんな理想郷を求めて帰化したアメリカ人は、自分や家族の自由を守るためにも、愛国心は世界一高いだろうと思った。自由を求めて新大陸に逃れて来た人はその自由を守る意思が強いと想像する。

「パサデナとハンチントンライブラリー」

「今日はパサデナを案内しましょう」と足を伸ばした。パサデナとはインディアンの言葉で「栄光の谷間」という意味だそうで、ハリウッドからも近い著名な避寒地・別荘として知られ、一年中、花が咲く町として知られる。

高級住宅地に一步踏み込むと、そこには見事な銀杏の街路樹が聳えて私の目を奪った。余りの見事さに息を飲みながら一種畏敬の念で仰ぎ見つめた。

日本の銀杏と種類が異なると見えて、樹高も遙に高く、葉の付き方が密でありしかも、一枚一枚の葉が小さく、葉柄が長い。茶色に変色せずに見事な金色に輝く様は見事だった。道路際では観光客らしき人が盛んにカメラのシャッターを切っていた。

しかし、ふと見た「パサデナアラームシステム」の表示を見ると、何か、優雅だが孤独なお金持ちがひっそりと暮らしている街の生活が偲ばれた。途中、パサデナ・インスティテュート・オブ・テクノロジーの看板がある学校の前を通った。教育環境が良い所と思った。



サンガブリエル・バレー



ハンチントンライブラリー
& ガーデン

「ハンチントンライブラリー」

ハンチントンライブラリーの植物園に入った。ここは砂漠園とかジャングル園に分かれており、自然の起伏を利用して、珍しいサボテンの数々が、巧みに配置されている。樹齢九五年というジャングルの巨木を始め、いずれも遠い原産地から取り寄せて、気の長くなる時間を掛けて仕立て上げた成果である。垣間見た、その「育てる息の長さ」に感心する。余りにも広いので途中で打ち切り出口に戻った。

そして、生まれて初めて「柏」の葉を手にとった。見事な大木で四方に広がった枝の下で「この木は何？」と立て札を見て始めてそれが柏と知った。椅子で休息しながら、何故、私の通った高等学校の徴

章にこの「柏」を使ったのか、考えた。その頑丈な材質とたくましい木の姿を見ると、何か、質実剛健とか朴訥とか当時の社会が、若い青年に、上滑りしない人生を期待し、浮薄軽佻を戒めていたことが分かる気がした。

この公園の名前にあるハンチントンとはどんな人物かと興味を持っていたが、歴史の本には南北戦争の後、大陸横断鉄道を建設する場面にハンチントンなる人物は出てくる。

その彼は「懐中に2万ドルの大金を持ってカリフォルニアからワシントンにやってきた。そして懐の金を使い果たした代わりに、横断鉄道敷設の権利書を持ち帰った」そうである。

鉄道の敷設には連邦政府は広大な公有地を無償で提供したり、返済条件の曖昧な多額の政府融資もあったらしく、返済しない融資も多額にのぼったらしい。

現代の感覚で云うと「贈収賄事件」と「詐欺・横領事件」の被告になったかも知れない人物かも知れない。西部開発の時代には意欲を刺激するために、企業家は暴利を貪る機会があったのかも知れない。

そんな歴史的な背景があれば、個人の遺産を市民が利用できる形で維持することは、当然かもしれない。



「ハリウッド」

16日にラスベガスから戻って、帰国の準備を済ませた17日の午後、再びR様のご好意の運転でハリウッドに向かった。

ハリウッドは私の世代には洋画の代名詞でもあったし、「アメリカ文化の象徴」でもあったし「映画」そのものでもあった。

途中で有名なUCLAの構内を通るとRさんは感慨深そうに「昔と随分変わったわね」とつぶやくように仰言る。彼女は渡米してここでも勉強したらしい。私の学生時代には、アメリカ留学はまだ不可能だったから夢のまた夢に過ぎなかった。当然、この著名な大学も知られていなかった。「入学はやさしいが卒業の難しい大学ですか？」と聞くと、「卒業するには日本人は語学力がついていけない人が多い」とのこと、更に「夏の語学講習会に参加しただけで日本に帰って『UCLAを卒業した』と云う人がいるみたい」とのことだった。

日本の語学教育は、明治の時代が必死に取り組んだ、急速な西欧化、文化の移入を実現するための、徹底して文献の理解が中心になっていた。従って、難解な論文を読みこなし、新しい概念を日本語に導入する能力が評価された。反面、日常の簡単な挨拶一つ出来ない「不完全な語学教育」で満足せざるを得なかったのであろう。

「サンセット通り」とか、「ビバリーヒル」等、テレビドラマで耳にした地名は、一種のノスタルジーを感じた。そこには日本では見られないような豪勢な住宅が立ち並んでいた。

日本が金余りのブームに沸いた時代に、豊富な資金で、得意になった日本の投資家がこの付近の高級ホテルを買収したが、運営のノウハウも持たないために、やがて大きな損失を出して撤退したそうである。そういえば、日本のブランドは「トヨタ・ホンダ」を除いて何も見えなかった。かつては日本の銀行の支店があった筈であるが、日本の金融機関が全く姿を消していた。

エルメスとかグッチ等の店が並んでいる高級品の並ぶ通りもあった。昔は日本からの出張者がロスに来ると、何よりもまず、次々に土産物として買い漁っていたそうだが、私ども老夫婦には無用の場所に過ぎない。

ハリウッド市内で車を降りて、グレタ・ガルボという大女優やジーン・ケリーと言うダンスの達人の「手形」や「足型」や「メッセージ」が床に彫られている町並みを歩いた。「ここでオスカーの表彰式があるの」というコダックの劇場前で、私たちも記念写真を撮ろうとしたら、いきなり正装の婦人が現れて、記念写真の列の中に割り込んできた。そして、撮影が済むと、「Give me chip!」と手を出して来た。アメリカの乞食は豪勢な盛装しているのである。



「ラスベガスの空港とグランドキャニオン」

14日の朝、8時44分にロスの空港を出発するために、娘の家を6時に出かけた。晴れ渡った暁の空には、金星が大きく輝いていて「美しい!」と思った。

テロ対策のために、搭乗に先立つ空港の保安チェックは、私たちの予測を超えた厳しさで、黒人の検査官が私の装具をつけた靴まで脱がして調べる厳重さであった。ただ、いかにも申し訳ないと言わんばかりの態度だった。

検査が済むと搭乗口まで長い通路を歩いて行かねばならない。重い足を運んでいると、後ろから来た電動車が、不意に横で止まった。運転していた女性 年齢は不詳だが60位—私に手振りも交えて「乗りなさい」と車に乗せてくれて「ほっ」とした。そんなにして、遠く離れたゲートまで運んでくれたが、見知らぬ東洋の老人にも親切だったアメリカの国民性に感動した。

カリフォルニア州のロスアンゼルスからネバダ州のラスベガス空港に行く。ロスを飛び立った飛行機は、「これが砂漠です」と言わんばかりの凄い荒地の上を飛んだ。こんな砂漠の中だから原爆の実験も

出来たのだ。一本の木もなく、一片の緑も見えない。ただ、一面が茶褐色の海である。ラスベガスには、9時52分についた。

機内では、前の席には大相撲の小錦のような巨大な中年の婦人が席を取っていた。三人席だったが彼女は肘掛を外して二人分の椅子を占有していた。そして一時間の飛行中にもアイスクリームを食べていた。「これではアメリカに肥満が多い筈」と納得した。肥満の基準が日本とは桁違いなのに感心した。

飛行機を降りて、待合室に出ると、そこにはスロットマシーンが勢ぞろいして乗客を出迎えた。さすが、ギャンブルを解禁した都市の玄関口らしい。娘が「バゲージクレーム」（荷物受取）に荷物を取りに行ったが、そのまま、何の連絡も取れなくなった。そこで妻が東京で借りてきた米国用の携帯電話で娘に連絡すると、旨く連絡がとれた。「バゲージクレームに来たが、後戻りができない。二人でこちらに来てくれ」とのこと。

見知らぬ土地なので心細かったが「バゲージクレーム」という、案内を頼りに、エスカレーターを降りると、そこでは、大きな石造りの「さそり」と「コブラ」が出迎えてくれた。指定された自動電車の乗り場に着く。やってきた電車に乗って、飛行場の端から端に辿ってようやく「バゲージクレーム」にたどり着いた。

さすがに、無事に娘に再会が出来てほっと安堵の胸を撫で下ろした。余りにも飛行場を拡張したために、構内の移動連絡に電車を使わざるを得なくなったものであろう。海外旅行では現地で使える携帯電話を持っていくことは非常に便利であった。

「観光拠点の北空港」

この国際空港から、市の中心部を通り抜け、北空港まで専用のバスで移動する。ここには、「シーニック（観光）航空」という航空会社がグランドキャニオン観光の専用の飛行機を勢ぞろいさせている。

その飛行機はプロペラ機で双発・上翼の古風なスタイルである。旅客は一四～一六人・機長と副操縦士だが、窓からの視界が広い構造になっており、乗客が下界の景色を楽しめる構造である。

これを利用する乗客は、ほとんどが各国からの観光客で、国際空港に降り立つと、荷物をそのまま持ってここに直行し、グランドキャニオンの観光が済んでからホテルに入る手順である。従って、沢山の荷物が観光の間、この空港に預けるシステムなのである。

搭乗の案内があり機内に乗ったが、通路を挟んで、二人掛けと一人掛けの椅子があった。同じグループには車椅子の老婦人が一緒だったが、一生懸命に自力で移動の努力をしていた。

機内では観光案内の放送がイヤホンを通じてあるが、それは英語・フランス語・デンマーク語・日本語の4ヶ国語と表示されていた。ドイツ語はなくデンマーク語になっている点、「おや?」と思った。想像以上に北欧からの観光客が多いのかも知れない。そうしてみると機長の体格はがっしりとしており、いかにも北欧人という感じだ。



「グランドキャニオン」

この飛行場はネバタ州にあるが、離陸してやがて山地に差し掛かる。そこは一面の岩山である。砂漠・岩山・溪谷・原生林、そして巨大な「フーバーダム」に続いて「ミード湖」が眼下に広がると、ここはもうアリゾナ州である。切り立つ断崖、そこに一本の道が溶岩が固まった巨大な岩盤の上を走っている。「誰がこんな所にダムを作ろうと思いついたのか」と思わざるを得ない。約一時間の飛行の間、眼下に広がる風景からは目が離せなかった。

サウスリム（南壁）にあるグランドキャニオン空港に着く。山の中だけれど、歴代の大統領が訪問するので、専用機が利用できる広い滑走路があるとの説明だった。そこからは、観光バスの世話になる。日本人のガイドが英語交じりで説明してくれるから良く分かりありがたかった。近くのロッジで昼食をとる。観光ポイントからの眺めは、言葉で説明することは困難である。

説明によると、ロッキー山脈から南西に流れ出た川が地殻変動と浸食で、コロラド川になり、1000万年位前にグランドキャニオンが誕生したそうである。コロラド川の流は早く、強く、土砂を削り谷を深くする浸食の末、現在の川幅は4キロから30キロ、長さは350^{キロ}に達する。深さは1マイル(1600m)の谷も作っているとのこと。勿論、覗き込んで確認することもできない。

やがて日暮れが近付くと、真っ赤な夕日が岩石の壁を真っ赤に染め上げた。皆、声を失って無言で見つめていた。壮大な交響曲の終楽章が最後の一小節を演奏し終わる時と同じく、自然の偉大さに心身が魅せられる一瞬である。どれほど傲慢な人でも、この大自然を作った神の「み技」に感動を覚え言葉を失う瞬間であろう。対岸の壁面が夕日に赤く染まり夕闇が広がる頃、私たちはそこを後にした。

再びバスに乗り、暗くなった中を特設の映画館に行った。そこでは「コロラド川」という、コロラド川とグランドキャニオンを立体的な映像と音響で紹介する映画を見せてくれた。大きな画面いっぱい飛沫を上げる急流の凄まじさは、マリリンモンローの主演映画「帰らざる川」とは比較にならない迫力があつた。



軽飛行機による低空撮影で写した谷底や岸壁の風景には感心したし、歴史にしてもインディアンの世界からスペイン人の世界になり、やがてアメリカになった過程が紹介され、改めて、昔はスペインが支配していた土地だったことを思い出した。

「夕焼け観光」が済むと、現地に宿泊して「旭の観光」をする人を除いて全員がラスベガスに戻る。

ただこの付近一帯はインディアンの保護区であること、自然の保護は厳しいこと、そしてロッジに宿泊する人には「コヨーテがでできますから気をつけてください」と注意があった。

11月の、高原の澄み切った夜空には、鋭い鎌のような三日月がかかり、その印象的な月影は、我知らずの内に、「コロラドの月」という歌のメロディーをハミングさせていた。

帰りの飛行機の機長は、笑顔の可愛い、でも肩幅の広いたくましいバイキングの子孫を思わせる、そんな女性だった。私の直ぐ前の操縦席に座り、姿勢を正して計器を見ては色々と操作をしていた。昼間と違って夜は、真っ暗な砂漠の上を最短距離で飛ぶ。でも上空では寒さに震えた。

下を見ても光るものは一切見えない、日本であれば夜であれば地上の灯火が漁船の漁火が見えるのに、そんな光りの一切ない、真っ暗な闇の中を飛ぶ。爆音のみを単調に大きく響かせて、どこまでも広がる無人の荒地の上空を飛ぶ。

と、前方に小さな一点の光りがポツンと見えた。「あれは何？」思ううちに飛行機はそれに向かって真っ直ぐに飛ぶ。やがてその光は次第に太くなり、宝石にも似た輝きを始め、次第に大きく広がり、やがて火の海のような、明るいらスベガスの市街地になってきた。そして、出発した北空港に、飛行機は無事に着いた。

飛行場では、出発のときに預けておいた荷物を引き取り、行き先のホテルを指定したバスに乗り、親子三人は国際空港に近い巨大なパリスホテルに向かった。



「ラスベガスとホテル」

一面の砂漠と岩山、そして材木の宝庫原生林の真ん中である。世界大恐慌の対策として、時の大統領の名前を頂く、巨大なフーバーダム建設がコロラド川をせき止めて建設された。その建設の開発基地としての拠点ネバダ州ラスベガスの歴史のスタートになった。地名からして元のスペイン領だ。

砂漠の中に生まれたこの都市は、1930年代に完成したダムの水の恩恵を受けて、人工的な灌漑による豊富な緑が街に潤いを与えていた。(後で知ったがカリフォルニアもこの恩恵で農業を成立させているとのこと)街路樹には一本一本、しっかりした配管が施されてそこから給水が行われていた。

豊富な電力は夜間の照明に使われて「不夜城の街」を作り出し、更にネバダの州法でギャンブルが解禁されて以来、カジノがホテルに開設されて、常夏の気候、演劇・ミュージカルの提供、休暇を楽しむ人が集まる世界的な観光リゾート都市に成長した。消費税は15%だが全体としての税金が安い。洲により税体系が違うので要注意とのこと。

日本が観光立国を真剣に考えるならば、「ギャンブル悪党説」を考え直す必要がある。世界の先進国でカジノが許可されていないのは日本だけである。問題なのは節度を欠く「ギャンブル」の弊害で

ある。私たちは「不確定の将来予測」の渦中にある緊張感を失ってはならない。中国ではマカオが、韓国では済州島にカジノを武器に新しい観光地として世界の注意を集めている。ストレスを開放する娯楽として競輪や競馬を認めるのだから、カジノについても積極的な取り組みを図るべきと思う。私たちは禁酒法の施行が闇黒街の繁栄を呼んだ史実に学ぶ必要がある。

東にロッキー山脈、そして西にシェラネバダ山脈が屏風のように立ちふさがり、それに挟まれた巨大な高原の盆地に広がる砂漠地帯にネバダ、アリゾナ、ユタ、コロラド、ニューメキシコの諸州がある。従って高原にあるネバダは海洋性気候のカリフォルニアと比べると、太陽の光線が一段と強く、サングラスが欲しい状況だった。当然、西海岸とは風が運ぶ雲の形も違っていた。カリフォルニアの空が紺碧の一色だったのと比べると変化の多い空模様だった。

街の中を行き交う人には白人が多く、メキシコ系の人種は少ない。替わりに、街の看板にはフランス語やラテン語系の文字が目立ち、アメリカの中でも非英語文化の多いところだろう。メインストリートは片側六車線を車が川の流れのように流れている。しかし、ここでは日本車の姿はロサンゼルスほど目立たない。

この街で人々は日常の労働から解放されて、のんびりと休日の開放感を楽しんでいる。周囲には巨大な噴水あり、ローマやパリの有名な彫刻、建造物を模倣した像が並び、雨の降らない、陽光が一杯のリゾートである。高原のせいか光線は強く、気温も高いが空気が乾燥しているから汗をかかない。日陰の椅子に腰掛けてジュースを飲んでしていると暑さは感じない。



「ホテル」

ホテルの窓から外を見ると、駐車場の中で自転車を乗り回して何かをしている黄色のシャツ姿があった。「何をしているのかな」と思ったが、町に出てみると、この疑問は解けた。黄色のシャツには「POLICE VOLUNTEER」と印刷されていたのである。自転車を使ったの巡回は犯罪の予防であろう。

私たちが泊まったパリスホテルは大きく十文字をした構造で、ホテルに「キー」はなかった。替わりに「暗号化されたカード」が渡された。これはドアのキーにもなり、エレベーターの運転にも必要であり、ショッピングの買い物管理にも、ホテルの精算にも利用されていた。暗号化ロックは日本でも広まるだろう。

カードを差し込んでエレベーターに乗るが、それを降りると、そのエレベーターホールからは通路が四方に伸びていたので少々、面食らった。それはどの部屋からも違った眺望が楽しめる設計になっていたのである。

私たち親子の部屋には大きなダブルベッドが二つある部屋だったが、案内図で見ると、これは最小のスペースの部屋に過ぎなかった。その数倍から十倍の広さの部屋が沢山あるのに驚く。多分、贅沢に慣れたアラブの金持ちが泊まるのだろうか。

部屋の正面に岩山があり右から旭が射し夕暮れには左から夕日が射し、時々刻々と山合いの巒が影を作り表情を変えていた。

夕食のためにエレベーターで下に下りた。ホールを一步踏み出した瞬間、ここが屋内であるに関わらず、そこは「たそがれ」の街角の持つ「くつろぎ」の雰囲気満ちていた。私は、一瞬、「ほっ」と、心が休まったのである。強い日差しの太陽が西に沈んで、西空に明るい「残照」が残る「たそがれ」が訪れた安堵感である。一日の労働から解放された満ち足りた時間を、人々はくつろいで、家族や友人と談笑しながら歩いたり、赤っぽい街灯のともし火の下のテーブルでビールやコーヒーを飲んでいる。

ふと、ロンドンの夕刻の情景を思い出したが、ロンドンと比べて緯度は高くないので、「あれ、変だな」と思ったとき、妻が娘と天井を指差してクスクスと笑いだした。その天井は書かれた夕暮れの空だったことによろしく気がついた。夕映えの空は巧妙に作られた舞台の書割で、ほの暗い街灯の光りは、すべて夕刻を演出していたのである。

その道はカジノの一部になり「スロットマシン」や「トランプテーブル」が並び、制服を着たディーラーが静かに立つ。「スロットマシン」

の前では機械と向き合った人が孤独なゲームを静かに楽しんでいる。日本のパチンコの持つ騒音がないだけよいのかも知れない。

「知らなかったアメリカ」

「アメリカの野菜」

アメリカの野菜には驚嘆した。余り美味しいので日本では手をつけない生野菜をバリバリ食べた。トマトは赤くても実は固くしっかりしており、レタスの葉は厚く歯ごたえがありながら美味しい。ほうれん草には日本で昔食べた旨味があったし、日本で見られなくなった「ふだん草」をスーパーで見つけて食べたが、大きく柔らかく、懐かしい歯ざわりと味を楽しんだ。動物性の食事が中心のアメリカでは、野菜の果す役割が大きいのもかもしれない。少なくとも米食中心の日本食よりも野菜に対する要求が強いのではないかと。

それにしても日本農業は、野菜作りに失敗したのではないかと率直に思った。もっと野菜が美味しく食べられるドレッシングの研究が必要と思う。



新鮮な野菜たち

この野菜たちに、懐かしい
歯ざわりと、味を感じた

「共生の社会」

電動車椅子に乗って一人で旅行している障害者も多かった。これはアメリカでは極めて普通の光景らしい。物理的なバリアフリーの整備が進んでいること、個人の意欲を尊重すること、が裏づけになって

いるのだろう。周囲の人々は極めて当然の状況として本人の意思に任せて特に手も出さない。

空港内で車椅子の旅行者を沢山見たが、押している人にはチップを払っていた。「なるほど」である。サービスの提供はするが、その経費や対価は受益者の負担なのである。

視力の障害があるために、白杖で歩く人はいたが、日本のような点字ブロックは見る事が出来なかったし、介助する人の姿も見えなかった。点字ブロックがないので、足元の不安定な私には、どこに行ってもとても歩き安く楽だった。レストランのチップは代金の20%とのこと。結構、かさむ経費である。

肥満人口の多い社会なのに驚く。娘の宿の管理人も巨大な婦人で歩くことすら不自由に思えた。だが他方でスリムで活動的な女性は大股で闊歩して、肥満グループが不活発なことと対照的だった。高齢の障害者でも車椅子を利用して旅行する活動的な生活習慣を失わない人がいる半面、中年過ぎて気力の消えた人もいた。しかし、不思議と酔っ払いには出会わなかった。

パソコンの利用用途は更に一段と広がっている感じで、機内でも子供が一人で子供向けのプログラムを楽しんでいたのを見て、日本の立ち遅れが大きいことに問題を感じた。

「おや？」と思ったのは、飲料水を旅行者は必ず携帯していたことである。日本人よりも水分の補給に真剣なことと、水道水がフーバーダムの水では飲めないからの自衛手段かも知れない。

16日午後、1時55分発でラスベガスを後にロスに帰った。その空港の待合室で気がついたのは、私たちの前のベンチの白人の老夫婦がパスポートを取り出して話していた事だった。パスポートを必要とする、非アメリカ人の白人旅行者がいる反面、褐色のアメリカ市民が同居している社会の実情を前に、何かこれまでの常識的な知識が混乱し始めた。

飛行時間が1時間少々なので、少し横着を決めて、搭乗前にトイレに行かなかった。狭い機内でトイレに行く気もなかったが、ロスの空港で飛行機を降りて、トイレに急いだ。老人はトイレの間隔が短くなっている。片マヒの足で安全の鉄則を破り、急いだために、足がもつれ、右足が左に廻ってしまって転倒してしまった。

驚いたことに、直ぐ見知らない外人が二人で両脇から助け起してくれたことだった。とっさに「Danke schön」と口からドイツ語が出た。私が日本人から地球人に突然、変異した瞬間の体験だった。何故？どうして？学生時代以来、全く使ったこともないドイツ語が自然に口から出たのか。解釈の出来ない不思議が残る。



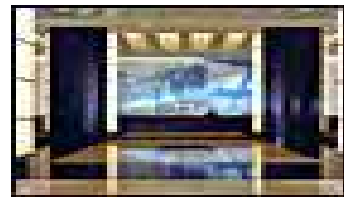
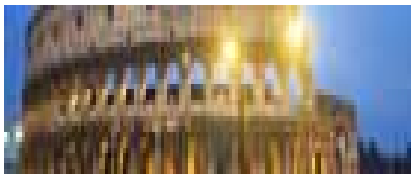
アバの歌に涙溢れる

「ミュージカル『マンマ・ミーヤ』」

11月15日は、49回目の結婚記念日である。娘がマンダレーベイホテルのミュージカル「マンマミーヤ」を電話で予約してくれた。そのやり取りの電話を聞いて、その流暢な対応に、いつの間にこんなに成長したものかと驚き感心した。

劇場は独立した建物でなくホテルの中にあった。そのマンダレーベイホテルに行って先ず驚いたのは、その敷地の広さであった。帝国ホテルを4つ位合わせた広さである。その建物に色んな施設が詰まっていたのである。いかにもマンダレーの地名にふさわしい南国のビルマ的な装飾、広々とした空間にカジノがあり、無数のスロットマシンやトランプ台、更に巨大スクリーンにはバスケットの試合が映されて、観客は勝敗や得点を賭けていた。

ジ ホテル アット マンダレーベイ



「マンマ・ミーヤ」はアバの歌を集めて、一つの物語として組み立てたミュージカルである。

私とアバの歌との出会いは古い。それはまだ40代の後半、人生で一番油が乗っていた部長時代のことである。私は、企業体質強化のために、分離独立した工務系技術者を中核とした新会社の営業責任者に指名された。そして、新しい社運を賭けた技術導入のため、数人の専門家と共にデンマークに長期出張した。その頃アバは、世界を廻って北欧のスターとして大活躍していたので名前を知ったのである。

帰国後、数年の努力もむなしく、その国内展開のプロジェクトは、既存「業界」の悪意による、様々な危険に晒される状況が明白となった。刑事罰を承知で進めるべきという専務の意見に逆らって、私の決断で遂に市場から撤収することにした。

部員の全員を適性にに応じて新しい部署に配置したので遂に部長一人の部になってしまった。私は上司の指示に反攻した責任を取る覚悟をしていたが、予想に反して、そんな私を親会社は救い上げて、札幌支社長として起用してくれたのである。そして札幌に単身赴任した。私は目に見えない「神仏の加護」に感謝した。

その札幌の街で、偶然、アバのテープを見つけたのである。それを買い求めて歌声を聴いては単身の無聊を慰めていたのだった。

それから20余年が経ちそのアバの歌とアメリカで出会うことは不思議な縁だった。娘がこのステージを選んだのは「ほかに好いステージがないので」との簡単な理由だったのだけれど。

広い劇場の椅子は時間と共に次々に埋まっていた。開幕は、いかにもアバラしく轟音にも聞こえる音楽で始まった。下段に演奏家が座り中段に音量調整の機器があった。次々と歌とダンスで舞台は進行して行く。さすがは歌の詩は分からなくてもメロディーは十分に楽しめるアバの歌である。

劇中の会話で時たま爆笑が湧くが、気をつけていると笑っているのは3割程度の人である。ネイティ

ブでなければ笑えないジョークに私と同様に、同感しない人が多いのに安心した。それでも好きな「ダンシングクイーン」を楽しく聞くことが出来た。

ミュージカルはアメリカの文化といわれる。ヨーロッパの貴族文化として発達したオペラの歌とバレエの持つダンスがミックスされ、アメリカ文化として成長したと言われる。オペラ歌手が自分の肉声で広い会場の隅々まで聴衆に感銘を与える声量を誇るために大柄の女性が多いが、現代の技術で肉声を大きくすることは何も問題がないのだろう。激しいダンスや所作に伴って息切れを起さずに、同時に歌う難しさがあるミュージカルでは。歌唱力と共に、迸るようなエネルギーが求められる俊敏なスリムな歌手が揃った舞台だった。

知人のいない、未知の札幌で一人、宿舎でこの美しく心を躍らせる「ダンシングクイーン」のメロディーを聞いた日のことや、北欧の夏の光りに耀く田園の風景を思い出しながら、いよいよ最後のフィナーレを迎えた。

するとフィナーレでは、何と、ステージで一度歌った歌なのに、再び出演者全員が舞台でこの「ダンシング・クイーン」の合唱を始めてくれたではないか。

それを聞くうち、何故か理由は分からないが、両眼から涙が溢れて止まらなくなってしまった。

何故だろう？

デンマーク時代への懐旧の涙だろうか。

健康に飛び回っていた北海道時代を偲んだ悲しみの涙なのか。

それとも、障害を口実に社会の表舞台から身を引いている不甲斐ない自分に対する悔し涙なのか。

妻は両親の写真を抱えてやはり涙が溢れていた。

「ダンシング・クイーン」のメロディーはアバからの私への応援歌と受け止めた。

何故って「You can dance you can jive」という呼びかけは、私に「まだまだ、出来るよ」「もう一度やろうよ」という励ましの声援に聞こえたのである。

それ以来、歌詞にあるセブンティーン(17歳)を意識的にセブンティ(70歳)と聞くことにした。

「もう70歳、ではなく、まだ70歳じゃないか。人生にはまだ遣り残した仕事があるだろう。頑張っ！」彼女たちの私に対する応援が聞こえてきた。

全身に再び立ち上がる勇気が漲ってきた。そこで妻に言った。

「そうだ！まだ引退なんかしない。もう少し頑張るから頼むよ！」

二部 私が考えなければならない事

「アメリカ社会と国家の歴史を考える」

一つの権力体系としての、アメリカ国家の特性、それと別に、民衆の感覚や価値観に根ざした社会的な行動基準を通じて形成されたアメリカ社会とを、分けて考える必要を感じた。

アメリカの持つ「文化の坩堝」的機能は、あらゆる個別文化を飲み込み、新しい文化の合金として溶かし込んでいる面と、「共存」という形で「個文化」を尊重している面があるように見えた。

「他の文化を尊重」することは、複数の「文化共存」を可能にする文化を持つことの証である。そこには、それを可能にする空間の広さと、ある適合条件の元では人々の承認が得られるのであろう。



東部社会で迫害されても、モルモン教徒はロッキー山脈を越えて、砂漠の中のユタ州に安住の地を見つけることが出来た。しかし、南部社会の黒人はKKKにより人権の向上が妨げられている。

日本は島国であるために、権力の迫害に対して逃避できる場所、空間の余裕がない。仕方なく「長いものには巻かれる」ことが生きる知恵として発達したのではないか。戦前の治安維持法から逃れるために、少ない人が亡命を志したが、反対に敵性外国人として逮捕されている。避難の余地がないことが前提で日本の文化は成立した。

この「共存を許す」適合条件に気がつかないと、畏をかけて、挑発し、相手がかかるのを待つ、そして徹底的に痛めつけて再起を許さない、と言う狩猟民族の本能が発動する。

私たちは二度と狩猟民族の挑発に乗るような過ちを犯してはならないのである。

アメリカには、信仰の自由を求めヨーロッパから命がけで海を渡った「宗教心」の篤いプロテスタントを先頭に、時代が下るに従って、閉塞感の圧迫から自由の空気に憧れてきたカトリック系の活力溢れる移民、ゴールドラッシュの一攫千金の夢を追いかける冒険者たち、やがてそれは、西に西に進み自分の生活スタイルを広めることが神から与えられた使命と信じ、その前にある先住民を葬り去ることに心の痛みを覚えない人々、更に太平洋を渡って西へ西へと軍事的覇権を追求する、その根底にはどんな精神構造があるのか。

少ない限られた天然資源を大事にし、富を分ち合い独り占めを許さない「小欲知足」の日本文化が、この「欲望の拡大」を基本におくアメリカ文化と、どこに接点を求め文化の「共存」を求めることが出来るのか、簡単に結論を出しえない課題であるが逃げられない課題に直面して腕組みししばし沈思する。

「アメリカの自由、日本の自由を問い直す研究」

そのためにまず、アメリカ独立宣言と、その根底にあるフランス人権宣言をもう一度見直して、アメリカの根っ子にある思想を再度確認する作業から始めたい。

現実のアメリカ社会は、多彩な民族を抱え広大な地理的条件を生かして「棲み分け」という「差別」により、しばしの平穏が保たれている。リンカーンの奴隷解放に関わらず、南部黒人の劣悪な社会環境は百年間改善されず、キング牧師の努力やケネディー大統領の政治的決断がなければ黒人は捨てられていた社会だった。

キリスト圏イスラム圏という大きな文化集団の間ではなく、言語の通じる小さなコミュニティー単位で、「小さな棲み分け社会」が成立し、それがアメリカという多文化社会の基板となり、「共存」し「共生」しているのではないだろうか。住宅地も城壁に守られて、一つの文化集団のみが生活の出来る状況

で、出入りを監視するシステムが必要になっている。

多様な「価値観の尊重」が根底にあるから「お面」は沢山あると思ったが良い。その「お面」をまとめて「国民」がバラバラにならないよう「扇の要」として「国旗」があり「国歌」があると思う。

日本のように権力者が作り、それに国民が服従する形とは基本的に違う。アメリカの建国の理念「自由」に賛同して世界から集まった人々だから、「自由を守る」観点から軍隊にも積極的に参加すると感じる。

そこで、人の求める自由は何からの自由なのか、見てみたい。嘗て、人間が欲望に執着する問題に関連して、恩師に指摘されたことが一つある。それは、「『自由』とは、フリー・フロムであって、何の束縛からフリーになるのが問題である」と自由とは自分を束縛している「何もの」からの解放であると、教えてくれた。

アメリカの自由は、フリー・フロム・フューダリズムがあるとされる。これは「ヨーロッパの封建的な身分制」から解放された自由を意味して、「市民的な自由」の獲得が目標となる。これはフランス大革命の理念とも一致する。

日本の場合は、敗戦により占領軍から突然「与えられた自由」で人々は、その可否について、節度について、何の検討をする暇もなく受け入れた思想に過ぎない。遂には勝手な議論が横行し、すべての束縛を否定する「自由」が日本的な「自由」とされてしまった。それは、改めて我々が問い詰めなければならない言葉である。

人が自由に生きるとは、身分的な束縛に関わらず、自分の特性を生かして、自分の個性を十分に発揮できる生き方であろう。先天的、後天的な身に備わった能力に従って色々に生きる生き方。その生き方相互には優劣はない。そこには、どれだけ自立して生きるかの区別しかない。



アメリカの自由で気にかかる部分がある。それは「パックス・アメリカーナ」と言われる国際政治の分野の一連の軍事行動である。

「西へ西へ」と民主主義を広める行動が国民の揺るぎ難い信念とすると、日本が戦後連合国から批判された「八紘一宇」と何が違うのであろうか。ローマ帝国が地中海世界を統一した故事に習い、世界を地球規模で統一しようとしているのだろうか。

そんな覇権主義では、宗教的な対立は益々激化するだろうし、肝心な西欧式民主主義も育たないし、勿論、自由のかけらもなくなるのではと、心配する。

「アメリカのパブリックと日本の公共を考察する」

「公共」については、現在の横浜では中田市長が「公共は市民が作り出すもの」と論陣をはっているが、アメリカの市民が生み出した「パブリック」という概念は、日本の一般的な「公共」とは、ニュアンスに差がある感じである。市民の一人一人が、生活基盤の、より一層の安全化を具体的に目指す活動を通じて、はじめて真の「公共 パブリック」が生まれ育つのではないかと考える。

アメリカでは五車線とか六車線のフリーウエーを車は流れるが、日本ならさしづめ、料金所の大渋滞が起きる心配がある。しかし、フリーウエーは料金がフリーなので、渋滞は起きない。道路を作り保全するのは「公共」の仕事だが、作った道路の利用は市民の自由である。「公共」がここで料金の徴収などしない。

出来上がった道路に交通標識を設けるのは「公共」の仕事で、これを妨げる「広告看板等」は一切、見かけなかった。自粛なのか禁止なのか、これは新鮮な感動だった。日本の道路は無秩序に広告が乱れて肝心の交通標識や信号機の「公共機能」を阻害していることは反省しなければならない。

日本の都市は、戦後の焦土から復興するに当たり、現在のモータリゼーションを前提に都市計画を作らなかった。先見性を欠く都市計画は「公共」の背任とも言える。唯一の例外は名古屋市で、「将来必要」と50メートルの道路を作り、世間の非難を浴びたが、最近ようやくその先見性が感謝されている。長期的な視野で計画が進められることが「公共」の大きな特色であろう。「公共」と言いながら、多くは近視眼的な都市構想しかもたず、無秩序なスプロール開発を許した「公共」は「欠陥公共」である。



「狭隘道路地域」を生み出した「欠陥公共」は、その是正を迫られるが、土地の私有制度と関連して、その是正は不可能に近い。

元来日本は狭い土地なのだから、車社会のあり方は、狭い土地を前提に「公共」は考えるべきなのに、広大な土地の上に築かれたアメリカ社会の真似をすることは許されない愚行である。歩行者のための安全通路の確保を優先して一車線化と一方通行化、区域外駐車場の整備等、地域に合った創造的な解決策を提示するのが「公共」の責務であろうと期待される。

それにしても日米には「公共」の意味と役割に差がありそうな感じがした。最近、日本の道路公団の内実が明らかになるに連れ、「公共」施設は、「お上」の都合で計画され、その「悪代官的」な官僚が私利私欲で保身の道具に使っている感じがする。それは、無理に社会資本の整備を、余りにも短期間に急ぎすぎたから派生した問題と複合しているのかも知れない。

日本は歴史的に、長い封建時代に定着した「お上」意識を含む、一種の「長いもの」に対する「諦め」の文化があると言われる。逃げだす自由のない島国では、当たり障りのない態度で、自己主張を抑え、右顧左眄して保身を考えることが賢い生きかたとされた。

明治の福沢諭吉が日本人の持つ公衆道徳の欠落を嘆いたのも多分、日本には「パブリック」に該当す

る意識は、「余計な口出し」として忌み嫌われていたからかもしれない。西欧社会の「パブリック」概念は、「プライベート」に対応する概念でもある。「市民の意識差」を比較して調べてみたい。

いま、私たちが手がけようとしている、区民の自主的な巡回警備による犯罪の予防活動、一方通行と歩道の整備による交通の安全を骨格にした「街づくり」、老人の活力を維持する「コミュニティの努力」、健康なスリムな体質の実現に努力する「健康の促進と人の和をつくる運動」、成人病や生活習慣病を撲滅する「みんな幸せにする運動」等・・・こんな活動を通じて「生まれ来る意識」の中に、とても大事な「私たちが作り上げた公共」の意識があるのではないかと思う。

これは私がおその実現に努力した「コミュニティゾーン」は、「公共」の仕事といえ、一市民の私にも、掛け替えのない愛着のある大事な「我が街」になった、という意識変化の体験があるからである。「ユニークな自己決定をするよりも、他人と同じ意見とする」、「社会的なルールでも皆で破れば怖くない」、こんなに「群れ」で歩く日本人に「公共」を求めることは至難の業であろう。

「地縁、血縁の絆」を中心に成立してきた日本の社会 夫婦・親子・友人 が「暗黙の了解」が成り立つのと比べ、「価値基準が多様化」してあるアメリカ社会では「社会ルールに従う」生活習慣が確立しているのではないだろうか。是非、比較研究してみたい。



稲作を中心にした日本の社会には、弥生時代以来、灌漑用水の配分に始まり、年間の作業のスケジュールにいたるまで、集団の一糸乱れぬ協働作業が必要なので「和」の文化が求められる。狩猟を中心にした社会が求めるものと、何が違うだろうか。

デンマークに滞在していた時に、訪問したご家庭が「百年前に建てられたアパート」と聞いて、「石造りの文化」の長命なのに驚いた。焦土の中から、短期間に社会資本を充実させなければならない日本の「社会資本」の整備が如何に困難か、理解できた。

アメリカの豊富な資源を前提としたモデルと、乏しい資源を分ち合わねばならない日本社会のモデル、広大な国土で自由に定規を当てて作ったアメリカと、狭隘な居住可能区域を前提とした日本型都市計画のあり方、取り組むべき課題は豊富である。

豊かな国アメリカと比較して、天然資源の貧しい日本の生活費が高い原因をもっと真剣に考えねばならない。折角の経済復興で円の値打ちが高くなったのに、その恩恵にあずかれないことは残念である。先ず、指摘されるのが税金のばら撒き是正「公共」の無駄遣いである。休日を増加させても給与水準を下げない官庁の体質、補助金行政を改めて、日没産業には退場を促すべきであろう。

そして、衣・食・住と生活費を安くしないと、国際社会の中で日本は国際競争力を失い、製造業はすべて海外に転出し、国内には、税金と補助金で生きる役人と年寄りと病人の社会になってしまう危険がある。多数の国民が現在政府が進める合理化の推移を異常な関心で見守っていることは、今回の選挙でも証明されたではないか。

棲み分けの思想

アメリカの多彩な人種の平和な居住の原則は「棲み分け」だそうである。人種のみならず、社会的ステータスも「棲み分け」の基準となる。同じ日本人も現地駐在員のクラスと、大企業の管理職クラスとでは居住の街も異なり、各種のトラブルを未然に防ぐ機能を果たしている。多文化社会の「共存」の知恵かも知れないが、これらの棲み分け基準は「金次第」と教えてくれた。

「棲み分け社会」をキーワードとしてみると、初めて「ウェストサイドストーリー」が貧しい中南米からの移住者社会の物語と分かり全体の筋書きが理解できた。

ロス暴動のとき、韓国人街は黒人の暴徒に襲われたが、これは黒人泥棒を射殺したことが理由とされている。しかし、韓国人の勤勉な仕事振りが行き過ぎて「働きすぎ」で黒人の職場が奪い取られた不満が素地にあったという解釈もある。私たちがかつてイギリスで工場の建設グループが非難された経験がある。「みんな休んでいるのに日本人は何故働くのか」と云う非難である。これは周辺の社会の習慣と隔絶した行動は、異文化社会の中では、「調和」が必要なことの教訓として受け取った。

アフリカ系の黒人労働者が重たいじゅうたんを軽々と運び、ロスでタクシーを利用した時は、インド人のドライバーだったし、ラスベガスの送迎バスやグランドキャニオンの観光バスガイドは日本人だった。彼らは非常に丁寧な接客態度で、アメリカ社会に生きる、移民の真剣な生き様が伺われた。社会的な階層の比較的低い所に移民の「棲み分けの場」がある感じだった。この「文化の棲み分け」「仕事の棲み分け」「金があれば使い、金がなければ働く」それが、アメリカ社会で人々が平穩に生活する知恵かも知れない。

しかし、これを「平等」というキーワードの光で見ると、「棲み分け」は一種の「差別」になるだろう。そして「差別」することで初めて人間らしく「生きる権利」や「働く職場の確保」が得られることも事実であろう。差別 個性主張がなければ、平等に生きることが出来ない社会の現実を見ると、両立が難解な問題である。

戻る

TO HOME